みめぐみの

第28部

みめぐみの

第28部

大谷光道著

目次

安心できる毎日……2
蜘蛛の子を散らす……4
価値か意味か……6
お金だけが全てではない……9
自由とは……13
安心への道……15
ちゃんと答えたい、この質問……18
講演のあとで……22
読者の頁……29
あとがき……31

安心できる毎日

只今ご紹介にあずかりました大谷光道でございます。しばらくお付き合いいただきたいと存じます。普通であれば○○会社の誰それということで自己紹介がすむのですが、私の場合少し補足させていただくことがございます。

以前は、丁度ここの北にあります東本願寺――今は正式な名前は「真宗本廟」に変わりました――の中に居りましたが、昨年嵯峨に引っ越しました。先代・父は十三年前に亡くなりましたが、生前より「伝統の教えを守り、広

く伝えていきやすい新天地を見つけて、そちらに移りたい」と申しておりました。しかし父の代にはそれは形にならず、私の代になってからしかも一昨年二月になってやっと、嵯峨にいいところが見つかり、移ることにしました。

丸太町通りの西の突き当たりを右に曲がって、まっすぐ清滝（きよたき）方面に行ってください。信号を二つ越えて二百メートルほど行った右側です。そこに、昨年新しく寺を構えました。毎年八月十六日には京都は五山の送り火で賑わいますが、その一つである「鳥居」のある山の真下です。わかりやすいところなので、お通りになった時には是非お立ち寄りください。

そういうことで、一般企業の場合でも、たとえば伝統的な技術を身につけた人たちが、物作りの信念の上から会社の方針と相容れないものがあったりして、会社を離れて別に新しい会社を興されるということはよくあることで、それみたいなものだと思ってくだされば結構かと思います。私どもの場合は、伝統の教えへのこだわりによるものです。

新しく建てた寺も名前は「本願寺」ですが、このＪＲ京都駅のすぐそばにある、今「真宗本廟」と呼ばれている元の「東本願寺」ではなく、そこを出て嵯峨のほうに移ったわけです。

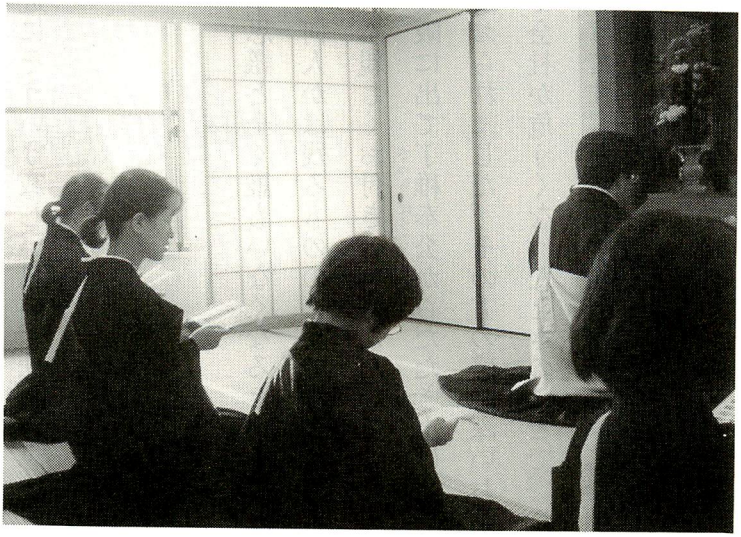
蜘蛛の子を散らす

先ほどもお話が出ていましたが、先頃秋篠宮様にお子様がお生まれになってたいへんお目出たいことで、日本中がわいており、今、テレビや新聞もそれで賑わっております。しかしこのご誕生のニュースが一段落すると、二十六日に国会が開かれて新しい首相が決まるというので、おそらくまた自民党の総裁選のニュースに戻って、それで持ちきりになると思われます。

この間テレビで、「自民党の人たちは、候補者の言っている政策とか考え方に賛同して選ぶというよりも、勝ち馬を追っかけているのではないか」という話が出ていました。もしそうだとすると、「総裁を選ぶべき立場の人が、

〝選ばれそうな人〟に投票する」という大変おかしな、まさに本末転倒が起こっていることになります。

調子のいいところには多くの人が集まり、調子が悪くなると雲散霧消、蜘蛛（くも）の子を散らしたように誰もいなくなるのは、世の常かも知れません。今ここには経営者の方が随分多くおいでになるので、今までにそのようなご経験がおありになるのではないでしょうか。私も同様で、寂しい思いをしたこともあります。そしてまた、蜘蛛の子のほうに廻って逃げた



御遷座後、初の得度式

こともあります。あるいはまた、身近にそういう寂しい思い、悲しい思いをされた方もおられました。

価値か意味か

ただ、そういうことがあっても、不思議と全く誰もいなくなるということにはならず、少ない人数ながら、必ず何人かは残るもののようです。

もう何十年も前のことです。たいへん親しくお付き合いいただいていた方で、小学校を出るなり故郷を離れ、大阪に出て丁稚奉公からたたき上げ、一代で我が国屈指の商社を興された方がおられました。その方の感慨深いお話を思い出します。事業を拡大しすぎて会社が危うくなったときのことで、やはり、社員がどんどん辞めていったそうです。その後、会社が持ち直した頃にお会いしたときに伺ったお話が思い出されます。

「会社が傾いたおかげで余計な人間がみんな辞めてくれた。本当に一緒に

苦労してくれた者だけが残ってくれた。これは自分にとってとてもラッキーであった」と。

このようにご自分の事業について淡々と語られたのは、さすが苦労を重ねた人だと感じたものです。そして「会社が傾いたおかげ」などと、マイナスをプラスに受け止められているところなど、やはり常人ではないと思いました。

辞めていかれた方というのは、その方の思いからすれば「会社の将来を見通しての判断」ということなのでしょう。しかし外から見ると、そのまま「損か得か」による判断と見えてきます。

そこで、このように辞めていかれた方と、その後も苦労を覚悟の上で社長と一緒に初志貫徹（しょしかんてつ）しようと会社に残られた方、いったいどちらが幸せなのでしょうか。

その「損か得か」という「価値」、たとえばお金、地位、名誉という損得

の世界と、やり甲斐、生き甲斐、信念、中にはあまりよい例とは言い難い「意地」というのもこれに入るかも知れませんが、そういう「意味」の世界があると思います。

いま、この二つの生き方をここでは試みに「価値」と「意味」に分けましたが、言葉の正確な使い方としては問題があるかも知れません。しかし私の言いたいところをお酌み取りいただきたいと思います。

さて、「損か得か」を物差しにして生きていくと、後になって空しい記憶しか残らないのではないでしょうか。

よく「悔いのない人生を送らなければ……」と言いますが、それはあとになって「良かった」と言えることであり、意味を追求した人生であろうと思います。

「どんな場合にでも価値を追いかけてはいけない」とは申しませんが、いくらかでも「意味の世界」のことを考えていきたいと思います。

お金だけが全てではない

映画やテレビドラマを見ていると、作者が「観客に訴えたいもの」が見えてきます。かつては「お金だけがすべてではない。お金よりもっと大切なものがある」という余韻の残るものがかなりの割合を占めていました。しかし最近はそうではなく、いや、全くと言っていいほど、そのような主張を盛り込んだものにお目にかかることができません。

そんな中で近頃、『ＡＬＷＡＹＳ　三丁目の夕日』という映画が大受けし、しかもこの映画はあらゆる賞を独り占めにしたそうです。見る機会を逃していた私も先日その機会を得たのですが、途中で何度も泣かされてしまって困りました。なぜこんなに涙が出るのか、「古き良き時代」というだけのものではないような気がします。

このドラマの背景となっている昭和三十年代といえば、戦後十年、今では

考えられないほど日本中が貧乏だった時代で、欧米などとは歴然とした経済格差がありました。貧乏であれば「お金が第一」になるはずなのにそうはならず、お金よりも人と人の絆や生きる意味、人情などが大切にされていた時代だったことが思い出されます。そしてそれらを大切にする心を蘇らせる映画だと言えるでしょう。反対に今、物があふれる程ある日本なのに、どうしてこんなにお金にがつがつする時代になってしまったのでしょうか。

修了式（大谷声明研修会）

これは私個人の一つの視点でしかないのですが、そしてまた経済と名の付くものには全く音痴の私が独断と偏見をもって少しその記憶を辿ってみると、こうなります。

小さい頃から、一ドルといえば三百六十円のもので全く変わったことがなかったので、「一ドル＝三百六十円」は算数の公式のようにいつまでも変わらないものだと思いこんで、私は育ちました。ところが、このレートが急に円が高くなる方向に動き出し、今から二十年ほど前には一ドル＝百二十円と、以前とは三倍もの円の「値打ち」が出てしまうことになり、「日本人は金持ちになったのだ」と、しきりに喧伝（けんでん）されるようになりました。どうやら、このあたりから日本人の心も変わり出したのではないでしょうか。

特に前よりお金がたくさん入ってくるようになったわけでもなく、おかしな話だと思っていましたが、でも確かに輸入品がやけに安くなってきたので、「ああ、やっぱり日本はお金持ちになったのだ」と思うようになっていった

ように思います。欧米からの輸入品が安くなったことは、日本人がそれまで持っていた欧米に対するコンプレックスにも変化をきたし、私たち日本人が急に偉くなったような錯覚に陥ったのではないでしょうか。

そこで、以前に比べて特段の努力をしたわけでもないのに、つまり思い当たる節もないのに金持ちになったために身も心も宙に浮いてしまって、心の空洞が出来たのではないでしょうか。

こうなる過程で、「意味」という私たち人間にもっとも大切なものをひょっとして失ってしまったのではないかと推測するのですが、どうでしょう。

そうだからこそ、『ＡＬＷＡＹＳ　三丁目の夕日』は、「意味」を思い出させ、教えてくれる、そこに涙が出るのだ、というのが私の仮説です。

最近では、少々極端に言うと「一攫千金のためには方法を選ばない」という「何でもあり」的世の中で、そんなのがかっこ良いと思われたりします。以前はモラルという枠があり、それを外れることは恥でした。つまり一定の

ルールの中で世の中が動いていた気がします。ずるいこと、卑怯なことはやらない中での競争が正しいものとされていました。「法律にさえ触れなければ、ぎりぎりのことをしても、自分さえ得をすればそれでよし」というのがジャパニーズ・ドリームだというのが我が国に定着してもいいのでしょうか。

自由とは

お釈迦様が前世に菩薩（仏様になる前段階で、修行の身）であった時の約五百五十話にも及ぶ善行を集めた『ジャータカ』という古代インドの仏教説話があります。インドで生まれた『ジャータカ』は広く世界に波及してイソップやアラビアンナイトのお話になったり、日本では『今昔物語集』などに影響を与えています。

その中の一つに『鳩の好きな王様』というお話があって、私が特に好きなお話で、よく引き合いに出します。

鳩の肉が好きというある王様がいて、家来が王様に食べさせようと鳩を何羽も捕まえて来ます。檻(おり)に入れて、少しでも鳩を肥えさせておいしくしようと、餌をたくさん食べさせます。その中で一羽だけどうしても餌を食べない鳩がいて、他の鳩から「お前、馬鹿だなー。何んでこんなおいしいものを食べないんだ」と言われ、さんざん馬鹿扱いされていました。でもその鳩は「いや、これでいいんだ」と、食べずに我慢して絶食を貫きます。歩くことも出来ない

声明の練習

ほどやせ細ってがりがりになったこの鳩は、ある日檻のほんのわずかの隙間からすっと逃げ出して自由を得ます。一生懸命餌を食べていた鳩は、皆王様の食卓に乗って食べられてしまったのはもちろんです。

おいしい餌という目の前の楽しみを貪って享楽という価値を求めるか、自由という意味をとことん追求していくかということを教えてくださるお話です。

安心への道

お釈迦様は、「正見（しょうけん）」と言って、「物事の姿をありのままに見る」ことをたいへん重要なことだとお説きになりました。

「物を正しく見る」と言えば、「目があるのだから、目の前のものがそのまま見えるのは当たり前だ」と、仰るかも知れません。確かにその通りですが、目の前のものがたんに自分の目の水晶体を通して網膜（もうまく）に映っているだけ

では私自身とは関係なく、うつろな目をしてぼーっとしているだけの状態です。網膜に映った映像が脳に達して何かの反応を起こして初めて、「見た」ということになるのです。そこに「見解」が生まれ、そこにはおのずと意識せずしても自分の「立場」があります。立場に強く影響するのが煩悩で、己の欲望や怒り、妬みの感情等々です。これはまるで色眼鏡を掛けているようなもので、水晶体の前に本来ないはずの物を歪めるものがあるのと同じです。この煩悩の眼鏡のために、物事が正しく見えることより、正しく見えないことのほうがむしろ多いのではないでしょうか。

物を見るということはそのまま「どのような見解が持てるか」ということにつながり、それがそのままその人の次の行動を決めていくもととなるのですから、「見る」ことの大切さがわかります。

ここに机があります。椅子があります。絨毯（じゅうたん）が敷いてあります。たとえば、この椅子について見ると、この椅子がいつ頃出来て、どのような人の手を経

て、或いはどのような材料がここに投入されてこの椅子が出来たか、も「椅子」を見ていく手がかりになるでしょう。

「物」だけでなく、いろんな事柄や事件についても同じことで、正しい立場からその背景や事情を見透かし、それが素直に受け入れられることが大切なことで、これが正見です。

もめ事が起こったときなどによく「相手の立場に立って考えよ」と言います。簡単に言いますが、これは容易なことではなく、事柄によっては不可能ですらあります。たとえばこれはもめ事ではありませんが、重病の人で医師からあと何ヶ月と宣告されている人がいたとします。そんな人のところへお見舞いに行ったとき、何と話せるでしょうか。意外と病人さんのほうが明るくて、見舞いに行った者のことをいたわってくれたりして、身の置き場がなくなったようなご経験はありませんか。

「正見」は、お釈迦様が覚りに至る第一歩としてお説きになったことです

から、もちろんこれは容易なことではありません。しかし、その方向に向かおうと努力するだけでも、大きな意味があると思います。

物事が正しく見えることによって、そこから「意味」というものが伝わってきて、それによって「本当の安心」というものが生まれます。その安心は、生きることとか死ぬことを超えた、本当の深い究極のもので、そんな安心が生まれるはずであります。

ちゃんと答えたい、この質問

今日のテーマは「安心できる毎日」です。「価値」はそこそこにして「意味」を追求することによって、本当の安心が生まれると考えます。

「安心」はふつうは「あんしん」と読みますが、私共のところでは宗教用語として使うときは「あんじん」と読みます。これは「自分の心を仏の願いの上に安置する、乗せる」という意味であり、これが浄土真宗の信心の要で

す。私たちを正しく導こうとされる仏様の願いの上に乗せていただくのですから、究極の安心が得られるのは間違いありません。仏様の願いの中で生きていく毎日を享受していくのが、私たち浄土真宗の流れをくむ者の結論です。

皆様はそれぞれの宗教をお持ちと存じます。各宗教、宗旨によって説かれる内容は違いますが、意味を追求するという点では同じのはずです。今日の私の話が何かのご参考になれば無上の幸せです。

団体参拝で宝物の見学

最後にもう一つ、短いお話を聞いてください。『増一阿含経』というお経の中の一節です。

ある人が地獄に墜ちた。そこには刑罰（真っ赤に焼けた鉄の玉を口に突っ込んだり、どろどろに溶けた銅の汁を飲ませたりする）を課する獄卒（地獄の番人、鬼）がいた。その鬼が「おまえは何処から来たのか」と尋ねる。それに対してこの人は「何処から来たかわからない」と答えた。また鬼は「それじゃあ、おまえは何処へ行くのか」と尋ねるので、「何処へ行くのかもわからない」と答えた。そうしたら今度は「何が欲しいのか」と尋ねられ、「飢えている、渇いている」と答えた。

という話です。

これは他人事とは言っていられません。考えてみると、今仮に同じ質問をされたらどうでしょう。何処から来たのか、何処へ行くのか、何が欲しいのか、自分のことでわかっていて答えられるのは三番目の質問だけで、しかも、

ほとんどこの人と同じ答えにしかなりません。私ども、というより私は、何でもわかっているつもりで、生意気にもいろいろと高邁(こうまい)なことを日常考えたり喋ったりしていますが、本当にわかっていることは、お腹が減って「お腹がすいた」と思い、お腹が膨れて「ああ、膨れた」と言っている、そこを行ったり来たりしているだけではないのか、と思われてきます。地獄であれ何処であれ、別の世界に行って、胸を張って言えることはどれだけあるんでしょう。

これからも今まで同様に意味を追求して、少しでもましな答えが出来るよう、精進いたしたく存じます。

本来宗教家として意味を見いだすことを第一にすべき私ですが、以上のようになかなか満足にいきません。今日は自分に言い聞かせるべき話を同時に皆様にも聞いていただきました。

講演のあとで

以上は、本年九月八日、京都伏見ロータリークラブで行った講演に、筆者が加筆したものです。

実は、もう少しお話ししておきたいことがあったのですが、講演では時間的制約や、浄土真宗でのお話になってしまって一般的でないので差し控えたところがあり、ここに述べます。

「正見」について

「正見」というのは、お釈迦様が最初のご説法で説かれた仏教の基本的な教えである「八聖道（正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定）」の最初の一つです。やはり正見だけでなく、八聖道全体もお話しする必要があるのですが、またの機会にしたいと思います。

「意味」について

「意味」については、次の御和讃を味わっていただくと、もっとわかりやすいものになります。

本願力にあひぬれば　　本願力に遇ってしまうことによって
むなしくすぐるひとぞなき　　空しく時を送る人はない（その後その人の人生は一変する）。
功徳の宝海みちみちて　　（本願力の内容である）功徳の宝の海は満々として
煩悩の濁水へだてなし　　煩悩の濁った水も功徳の宝の海に流れ込むと、融けて一味となる。

この御和讃の前半は、「阿弥陀様の本願力に遇うことによって、無駄な人生を送ってしまうことはなくなる」ということで、「念仏の教えによって本

願力に遇うことこそが意味を見出していく人生になる」と教えられています。

逆に言うと、「本願力に遇わない間は無駄な、無意味な人生を送っている」ということになります。ところが、何か意味のあるものはないかといろいろと模索しているうちに、仏法に出合ったとします。もちろん仏法以外で意味を見出す人もあるでしょう。

仏法に意味を見出した人は、当然、覚りを求めるようになります。中には自力で覚りを開く人もあるかも知れません。しかし「私は自力がかなわない凡夫だ」とさとって、他力・本願力によるしかないことに気づく、こういう場合に待っていてくださるのがこの御和讃で、深く胸に収まることでしょう。

さらにこの御和讃の後半では、本願力に出合った喜びが一つの譬喩（ひゆ）によって讃えられています。

どんなに濁った川の水でも、海に流れ込むことによって、濁りもどこかに消えて透明な塩味一つの海水になります。それで、私たちの煩悩（濁った川

の水）と南無阿弥陀仏の功徳の宝（海）との関係は、これと同じことだというのです。つまり、「本願力に出合って称える『南無阿弥陀仏』の功徳がその人に満ち満ちて、濁った煩悩までもがその功徳の中に取り込まれて、同じ功徳の宝に変わってしまう」ということで、本願力の大きさ、不思議さが讃えられています。

この御和讃は、親鸞聖人がご自身にまで浄土の教えを伝えて下さった七人の高僧（七高僧）と敬われた中の第二祖である天親（てんじん）菩薩の著された『浄土論』の

佛の本願力を観ずるに、遇ひて空しく過ぐる者無し。
能く速やかに功徳の大宝海を満足せしむ。

の部分を和讃にされたものです。

天親菩薩（ヴァスバンドゥ、婆藪盤頭）は世親（せしん）とも言い、四～五世紀頃の、現在のパキスタン・ペシャワールの方です。

天 親 菩 薩

初めは小乗仏教を学んで『倶舎論』等を著わし、大乗仏教を攻撃されていました。後に兄の無著菩薩から大乗仏教の深いことを聞き、前非を悔いて刀でその舌を切り落そうとされたが、「むしろその舌によって大乗の法を弘めるべきである」との無著菩薩の説得によって、心を翻し大乗仏教に帰依された、と伝えられています。多くの論を著わされ、世に千部の論師と言われています。

『浄土論』は、天親菩薩が浄土真宗で根本となる三つのお経

『仏説無量寿経』

『仏説観無量寿経』

『仏説阿弥陀経』

の深い喜びを表された御著作です。この三つのお経にこの『浄土論』を加えて「三経一論」というほど、『浄土論』は浄土真宗の中心となるものです。

私は、「意味の追求」と述べてきましたが、自分自身にとって何かたいへ

ん意味のありそうなことを見つけたとき、「それが何になるのか、それがどうしたのか」と自分に問い直すようにしています。それでも「こんな意味があるではないか」と答えの出るのが本物の「意味」であろうと思うのです。やはりそれは、今この世のことだけでなく死んだあとにも通じる「意味」でなければならないと考えます。

読者の頁

感想意見

富山県　河合　寛さん

「お釈迦様は？」シリーズの三部をあらためて通読して、二尊教の意味をよく理解させていただきました。二河白道の中に、釈迦の行け、弥陀の来いというお言葉が教主と救主との立場を示されているのですね。正信偈に如来所以興出世唯説弥陀本願海とある理由もうなづけるようになり有難いことです。これからもご指導ください。南無阿弥陀仏。　合掌。

北海道　高間　ヨシヱさん

阿弥陀様とお釈迦さまのお話、二河白道仏教を学ばせていただけて、ありがとうございます。お寺へなかなか伺えませんので、とてもうれしく拝読させていただきました。「観無量寿経疏・散善義」もっと知りたいと思います。「人の心もお金で買える」とんでもないことです。日本はどうなるのでしょうと思いました。

東京都　鈴木　健太郎さん

今回信心決定してから生きている状態を、大学入試に合格してからまだ大学に入学していない段階にたとえられたのは実にわかりやすく素晴らしいたとえで特に学生の心に響くたとえだと思います。

あとがき

みめぐみの刊行委員会

昨年十一月の御遷座、寺務所落成から早や一年。本願寺はみめぐみの紙上でも写真やお知らせ等で報告の通り、仮御堂を中心に幅広く活動しています。また、光道台下は企業の研修会等積極的に外にも足を運び、活動の輪を広げておられます。今回はそんな中から九月八日京都伏見ロータリークラブの依頼で「安心できる毎日」と題して講演されたものに加筆され御親教として下さいました。

その結びにある「何処から来たのか、何処へ行くのか、何が欲しいのか」との質問にドキッとされた方もあるでしょう。その模範解答は色々な法話や書籍でご存知の方もおられるでしょうが、光道台下は自分で考えることの大切さを教えて下さいました。日々の生活の中、心を仏の願いの上に安置してこの答えを自分の言葉でつかみたいものです。

ご意見・ご感想、ご質問お待ちしております。

バックナンバー、追加注文の頒布価格、送料は次の通りです。
『みめぐみの』1冊の価格は200円（税込）です。

○1冊～4冊＝送料及び振替手数料（70円）はご負担下さい
※送料　1冊＝120円、2冊＝160円、3冊＝180円、4冊＝210円
○5冊～9冊＝送料は実費、振替手数料は不要です
※送料　5～6冊＝210円、7～9冊＝290円
○10冊以上＝送料・振替手数料共に不要です

以上の要領で申し込みを受け付けます。折り込みハガキにご住所、氏名、電話番号をご記入下さい。ハガキに切手は不要です（ご住所には郵便番号をお忘れなく）。

みめぐみの　第28部

2006年11月5日　印刷
2006年11月10日　発行

定価 200円

著　者　大谷光道
発　行　みめぐみの刊行委員会
〒616-8432
京都市右京区嵯峨鳥居本北代町21
本願寺寺務所内
TEL.075(882)6262 FAX.075(882)6220
振替口座　01060－5－56990
印　刷　㈱中外日報社

みめぐみの刊行委員会刊